

1 利尻礼文サロベツ国立公園及び管理計画区の概況

(1) 利尻礼文サロベツ国立公園の自然環境・利用条件

本国立公園は北海道の北西部に位置し、昭和49年9月20日に指定された我が国最北の国立公園である。公園区域として利尻島、礼文島の約半分、北海道本土側の稚内市から豊富町、幌延町へ続く海岸砂丘林及びサロベツ原野が指定されている。関係市町村は1市5町（稚内市、利尻町、利尻富士町、礼文町、豊富町、幌延町）で、指定面積は24,166ha（海域を除く）である。

<利尻礼文サロベツ国立公園の自然環境>

本国立公園は原始的な自然環境が保存されている。植生自然度は、「植生自然度10：自然草原」が公園面積全体の約3割、「植生自然度9：自然林」が約4割となっており、公園全体の約7割が原始的な自然状態となっている。また全域的に風が強いため、利尻・礼文両島や海岸部では風衝植生となっている。

さらに、本国立公園内には数多くの野鳥の生息地・繁殖地が存在し、サロベツ原野（面積：2,560ha）は平成17年にラムサール条約湿地に登録されている。

各地域の主な自然の特徴を掲げると、次のとおりである。

- ・ 利尻島：火山地形、カール(圏谷)地形、寒地・高山性植物群落、山麓部の針葉樹林帯及び森林限界、海岸部の奇岩
- ・ 礼文島：海蝕崖、低標高の寒地・高山性植物群落、周氷河地形、岬、海岸部の巨岩・奇岩
- ・ 海岸砂丘地域：砂丘地形、砂丘林、砂丘間湖沼・湿地、海岸植生、風衝林
- ・ サロベツ原野：国内最大規模の高層湿原、大規模泥炭地、湿地溝、湖沼

<利尻礼文サロベツ国立公園の利用条件>

本国立公園の年間利用者数は約136万人（平成16年度）で近年横ばい状態が続

いている。主な利用時期は6、7月をピークに5月から10月に集約され、冬季の利用者は少ない。

本国立公園へのアクセス方法は道路、鉄道、空路がある。札幌から道路・鉄道を利用するとおよそ6時間の距離に位置する。また空路については稚内空港に丘珠、新千歳、羽田からの通年定期運行、名古屋（中部国際空港）、大阪（関西国際空港）からの夏季定期運航があるほか、利尻空港に新千歳からの通年定期運行がある。

（２） 管理計画の区分、各管理計画区の概況

< 管理計画の区分 >

管理計画区は、自然環境、地理的、地形的条件から、利尻島、礼文島、稚内市から豊富町を経て幌延町にかけての海岸砂丘地域、サロベツ原野の4地区に区分し、それぞれ、（ア）利尻管理計画区、（イ）礼文管理計画区、（ウ）海岸砂丘管理計画区、（エ）サロベツ管理計画区とする。海岸砂丘管理計画区とサロベツ管理計画区の境界は宗谷森林管理署所管国有林4172及び4173林班並びに留萌北部森林管理署所管国有林174、175及び176林班の東側境界とする。

< 各管理計画区の概況 >

（ア）利尻管理計画区の概況

利尻島は北海道北西部にある標高1,721m、周囲約60kmの円錐形の単体火山島である。北海道本土から洋上にそびえ立つ利尻山は、利尻礼文サロベツ国立公園のシンボリックな存在である。気候は亜寒帯気候に属し、1年を通して風が強い。地形はコニーデ型火山地形であり、ポン山等の側火山がある。中腹以上では侵食が進み、深い谷と鋭い尾根が発達し、頂上付近はガレ場となっている。また利尻島にはほとんど川がみられない一方、山麓部には湧水が見られる他、沿岸の海中

からも湧水が有り、漁場を潤している。植物相は本土とは異なった特異性を有し、北海道内でも最も高山植物に富む地域の一つである。山頂部周辺では、国内唯一のケシ科ケシ属に分類されるリシリヒナゲシや国内では利尻でしか見られないポタンキンバイ等の固有種、希少種が存在し、各所に寒地・高山性植物群落によるお花畑が見られる。山麓部はトドマツを中心とした針葉樹林帯が広がる。また利尻島湿原群の一つであるオタドマリ沼周辺ではアカエゾマツ林や湿原植物が見られる。動物相はヒグマ、エゾシカ等の大型哺乳類や爬虫類は生息していない一方、野鳥の宝庫であり、高山帯でのギンザンマシコやホシガラス、森林帯でのクマゲラ、アカゲラ、アリスイ、海岸付近でのウミネコ等の繁殖が確認されている他、渡りの中継地にもなっている。

利尻島への来島者数は年間約 22 万 4,800 人（平成 17 年度）で、主な利用形態はツアー客の観光バス等による島の海岸部めぐり（姫沼、オタドマリ沼、御崎、沓形岬等の園地巡り）や、鷺泊、沓形からの利尻山登山である。主な産業は昆布・ウニの採取やホッケ・タコ漁を始めとする沿岸漁業であり、特に利尻昆布は広く知られる名産である。

(イ) 礼文管理計画区の概況

礼文島は北海道北西部にある標高 490m の丘陵性地形の離島である。気候は亜寒帯気候に属し、1 年を通して風が強い。地形は海蝕崖地形であり、奇岩・巨岩が続く特異な景観を有している。植物相は島全体に寒地・高山植物群落が発達し、各所にレブンキンバイソウ、エゾノハクサンイチゲ等のお花畑も見られ、ハイマツが標高 150m 付近から出現する。また、レブンアツモリソウに代表されるように数多くの希少種や固有種が存在し、礼文島は別名「花の浮島」とも呼ばれている。動物相は利尻島同様にヒグマ、エゾシカ等の大型哺乳類や爬虫類は生息していない一方、野鳥の宝庫であり、トド島でのウトウや、久種湖でのアカエリカイ

ツブリヤバン、オオバン、草原でのツメナガセキレイやオオジュリン等の繁殖が確認されている他、渡りの中継地にもなっている。

礼文島への来島者数は年間約 22 万 9,300 人（平成 17 年度）で、主な利用形態は観光バスによる「島めぐり」（元地海岸、桃岩・猫岩、スコトン岬、西上泊等を回り展望を楽しむ）や、礼文岳への登山道や桃岩歩道、西海岸沿いの歩道（通称「8 時間コース」：スコトン岬からゴロタ岬、西上泊、宇遠内を経て元地まで結ぶ。）でのフラワートレッキングである。主な産業は利尻島同様漁業である。

(ウ) 海岸砂丘管理計画区の概況

本管理計画区は北海道北部、稚内市坂の下から抜海、豊富町の稚咲内、そして平成 15 年度に公園区域に編入された天塩郡幌延町に至る海岸と砂丘に係る地域である。この地域は海岸線に平行しておよそ 40km にわたり数列の砂丘が帯状に発達し、砂丘間には多数の湖沼群が存在する特異な景観を有している。気候は亜寒帯気候に属し、1 年を通して風が強い。植物相は海岸付近にはハマナス等の海浜性植物、海岸に近い砂丘にはミズナラの風衝林が生育し、背後の砂丘上にはトドマツやエゾイタヤ等で構成される針広混交林が成立しており、砂丘間には湿性や水性の植物が分布している。海岸砂丘林は、国内に数少ない原生的環境を良く保存している森林である。動物相はヒグマ、エゾシカ等哺乳類の他、鳥類が多数生息しており、国内唯一と言われるミコアイサの繁殖地がある他、オジロワシ等の希少な鳥類が見られる。また冬期には抜海港においてゴマフアザラシを観察することができる。

この地区の主な利用形態は道道稚内天塩線のドライブであり、6 月下旬には一面のエゾカンゾウ越しに日本海に浮かぶ利尻山を望むことができる。主な産業は、沿岸漁業及び酪農である。

(エ) サロベツ管理計画区の概況

サロベツ原野は、サロベツ川流域に形成された広大な泥炭地である。4,000年とも言われる時を経て植物の残遺体が堆積した泥炭の上に湿原植生が広がっている。低平地における国内最大の高層湿原を有する他、国内最大級の浮島のある瞳沼や大規模な湿地溝の発達が見られる等、国内では他に類を見ない規模の大きい湿原景観を有する。気候は亜寒帯気候に属し、年平均気温は5.9℃と冷涼である。植物相としては、湿性の高山植物やミスゴケ群が生育しているが、地下水位の低下に伴うと考えられるササの侵入拡大が懸念されている。動物相としては、ユーラシア大陸に分布し北海道に隔離分布している爬虫類のコモチカナヘビや世界最小の哺乳類であるトウキョウトガリネズミ等が生息する。また他の地区同様、多くの渡り鳥を観察できる他、チュウヒやシマアオジ等の繁殖地も存在する。近年の調査においてはタンチョウの繁殖も確認されている。本地区には国指定サロベツ鳥獣保護区(2,560ha)が設定されており、全域が平成17年にラムサール条約湿地に登録された。平成15年に、上サロベツの一部、泥炭採掘跡地を含む湿原域が新たに公園区域に編入された。さらに平成17年には自然再生推進法に基づく自然再生協議会が設置され、平成18年には上サロベツ自然再生全体構想が策定されており、農業と共生した湿原の再生のための取組が行われている。

この地区の主な利用形態はサロベツ原生花園や幌延ビジターセンターにある木道の散策で、木道からは植物観察や湿原水平景観の眺望が可能である。主な産業は湿原周辺部での酪農である。